

2024 春 ヤスクニ・社会問題委員会ニュース

2024年4月29日

発行 日本キリスト教会北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会

<巻頭言>

「ヤスクニ・社会問題委員会は 宣教委員会」

渡辺 輝夫

昨年、思いがけず教会内に埋もれていた戦前（1940年前後）の資料が見いだされた（報告5参照）。この資料調査に委員3名が関わり改めて当時の教会を想像している。戦局が急速に悪化していく中、教会もその一翼をになっ
ていく、なんとも痛ましく悲しい姿である。過去を批判したいわけではない。《教会が教会としてたつ》とはどういうことか、自分たちの問題なのだ。その意味でこの委員会は激動する時代に身を置く教会の宣教とはなにかを模索する「宣教委員会」ともいえないか。そんなことを思い巡らす一年だった。



教会にはこの委員会の活動に対し以下のような認識があるように思える。これは教会本来の

ものではない。教会にはもっと大事な働きがある。問題は「伝道」であり、「教会形成」（*括弧付きであることをご理解いただきたい）だと。だから、当委員会は余力があれば活動する程度でいいと。そこにあるのは教会とこの世（社会）を分ける二分化。そして救済機関として教会をこの世の上位に置き、「上から下へ」「内から外へ」と向かう優越主義。

これに、真っ向から問いを投げかけたのが、オランダの宣教学者J・C・ホーケンダイクであろう。教会と宣教へのパラダイム転換を訴えている有名な一文（「明日の社会と明日の教会」戸村政博訳1966）を引用したい。

《われわれは、教会についての思索や語り合いのなかで、正しい順序を維持しなければならない。その順序とは、神—世界—教会であって、神—教会—世界ではない》

ミッシオ・デイ（神の派遣）！ 神は世界の主なのだから、世界で起こるあらゆることが

もくじ

巻頭言 「ヤスクニ・社会問題委員会は宣教委員会」	渡辺輝夫	1
<報告1> 公開学習会Ⅰ 郷路征記さん「信仰を『植えつけられたこと』がすべての問題の根源」		2
<報告2> 靖国神社問題北海道キリスト教連絡会議 小塩海平さん『日本基督教会における未決の戦争責任について考える』 講演を聴いて	武藏 学	3
講師が訴えた「未決の戦争責任」そして今考えること	佐藤幹雄さん	5
<報告3> 公開学習会Ⅱ 小林昭博さん「近代家族の象徴としての聖家族と天皇家族 —家族・キリスト教・天皇制—」 公開学習会を視聴して	高見早苗さん	8
<報告4> 外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会(外キ協)リレー学習会 2023 金 迅野(キム シンヤ)さん「暴力にあらがいのちのことばを紡ぎなおす —マイノリティとともにあるキリスト者の道—」 講演を聴いて	西本詩生さん	11
<特別報告1> 「慰安婦」問題オンライン学習会に参加して	松本昌恵さん	13
<報告5> 2023年度 靖国神社問題全国連絡協議会 「第一次資料から見た日本基督教会—遠軽教会・滝川教会資料を中心に」 戦時下の教会資料発掘報告	畑 知佳	16
戦後責任を担う取り組み—地域の無料食堂—	稲生義裕	22

らが教会の課題なのだ。そこへと投げ込まれた教会は先立つ神の平和（シャーム）を世界に証する共同体なのだ（Ⅱコリント5：18）。考えてみればなにも突飛なことではない。神が世界にイエスを派遣（ミッシオ）されたことをわたしたちは告白しているではないか。「《ミッシオ》という概念は古代教会では三一論の概念、すなわち神の自己派遣、つまりこの世への御子と聖霊の派遣を表わす名称であった」（佐藤司郎「ミッシオ・デイとバルトの宣教の教会」）。第二次大戦後の世界教会運動の中から提示されたこの問いは限りなく広くそして深い。いまわれわれはそれに十分応えられているのだろうか。



今回の「ニュース」本誌にもさまざまな報告をとりあげさせていただいた。これらは決して教会の「外」で起こっていることの単なる報告でも活動のアリバイ証明でもない。たしかに理路整然とした神学的「正論」ではないが、しかし逆に、わたしたちがいままで二分化しておとしめてきた「外」「下」からの断片的な声になんとか耳をかたむけたいとの、ひとえにわたしたち教会と宣教の内実を問う宣教報告である。こうしてわたしたちは、ドイツ教会闘争の旗手M・ニーメラーのかの有名な言葉（*）に触発されて以下のようにみずから問いかけていきたいものである。

人びとが声をあげたときわたしは聴こうとしなかった。

教会の外の声だと思ったから。

人びとが世界の底より苦悩の叫びをあげているのに聴こうとしなかった。

教会の課題だとは思わなかったから。

そうしているとき、教会の言葉はやがて人びとから耳を閉ざされることになるだろう。

*彼ら[ナチス]が最初、共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった、

私は共産主義者ではなかったから。

社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった、

私は社会民主主義者ではなかったから。

彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声をあげなかった、

私は労働組合員ではなかったから。

彼らがユダヤ人たちを連れて行ったとき、私は声をあげなかった、

私はユダヤ人ではなかったから。

そして、彼らが私を攻撃したとき、

私のために声をあげる者は、誰ひとり残っていなかった。

〔伝承は多々あり、引用に厳密さは欠ける〕

（ヤスクニ・社会問題委員会委員長／夕張伝道所牧師）

<報告1> ヤスクニ・社会問題委員会

2023 北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会 公開学習会Ⅰ

日時：2023年7月17日午後1時～3時
講演：「信仰を『植えつけられたこと』がすべての問題の根源」

講師：郷路征記さん（弁護士）

会場：札幌琴似教会（ウェブ参加あり）

ご講演の録音を文字に起こし、講師の郷路征記さんにお目を通していただいた「講演録」ができています。

ご希望の方にお分けいたします。

*ヤスクニ・社会問題委員会 書記稲生義裕
メール：heiwa@ccj-toyohira.church
〒062-0906 札幌市豊平区豊平6条3丁目5-15
札幌豊平教会気付 ヤスクニ・社会問題委員会

<報告2> ヤスクニ・社会問題委員会

第54回

靖国神社問題北海道キリスト教連絡会議

2023年11月23日(木・休) 11:00～

講演：『日本基督教会における未決の戦争責任について考える』

講師：小塩海平さん(日本キリスト教会東京告白教会長老, 東京農業大学教授)

講演「日本基督教会における未決の戦争責任について考える」を聴いて

武藏 学

1. はじめに

日本キリスト教会(日キ)東京告白教会の小塩海平長老の講演を聴いて、感じ考えたところを記したい。特に戦後50年を迎え、1996年1月の札幌豊平教会総会において「戦後50年を迎えての日キ札幌豊平教会の罪の告白と新たな宣教への決意」(札幌豊平教会ホームページ参照)を採択したが、その今日的意義についても述べる。

2. 小塩講演を聴いて

小塩長老は旧日本基督教会(旧日基)の戦争責任は未決、放置されたままであるとされた。即ち、旧日基は被告人でありながら戦争裁判で裁かれなかった。原告はアジアの人々と教会、自らの良心、神である。そして本来、「教会の(立つべき)法廷とは、教会の主が裁きたもうことの教会の自己確認である。それは人間の私情によってではなく、人間の正義感や英知によってでもなく、厳密に神の言葉によって行われる。」(渡辺信夫『戦争責任と戦後責任』、新教出版社、1971年)との言葉を引用された。

旧日基の罪状として、神社参拝をして神ならぬ天皇を神としたこと、大会議長富田満牧師を派遣し朝鮮長老教会の神社参拝を説得し、これを拒否した朱基徹牧師を初め多くの殉教者を生んだこと、フィリピンにおける占領政策協力のため、当時神学生だった中田喜秋氏(戦後戦犯者とされ収監された)を派遣したこと等を挙げられた。そして、「自ら裁くことを忘れた教会は、世から裁かれ、捨てられ、踏みつけられる教会となるであろう。」(前掲書)との言葉を紹介されたが、日キの現状は正にその通りになっていると思えてならない。

1890(明治23)年の大日本帝国憲法発布により「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」(現人神)とされ、一方で信教の自由を認められたが、それは飽くまで「安寧ノ秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」と天皇制の枠内に限定されていた。翌年の教育勅語発布により天皇制絶対主義は国民各層に深く浸透することになる。

実は旧日基は1917(大正6)年の第31回大会に於いて「神社に関する決議」を行い、神社非宗教論を否定して学生が神社参拝を強制されるのは大日本帝国憲法の信教の自由と抵触するとの明確な意志表示をしていた(『日本キリスト教会50年史』67頁)。しかし、本決議の取消し・修正は無いまま1930(昭和5)年の第44回大会で「神社に対する進言」を承認し、行政官庁に神社が宗教であるか否かの判断を求めることになった。一方、同大会に「神社を宗教の圏外におく」との「神社に関する決議案」が提出されたが、これは否決された。つまり「神社を宗教」としつつ、神社が宗教か否かの判断を行政官庁に求める二律背反に陥ったと言える。従って、「進言」の後、もはや神社問題に関するこの主張(第31回大会決議;括弧内は著者)を確認したり公言したりすることはなかった(『日本キリスト教会50年史』76-77頁)。



↑ 皇紀二千六百年奉祝基督教信徒大会 1940年10月17日神嘗祭の日、青山学院に2万人が参集した。

そして、翌1931(昭和6)年の満州事変を契機として帝国主義的侵略への協力をより強く求められていく。1938(昭和13)年、皇紀二千六百年奉祝基督教信徒大会宣言では「我国は能く其針路を謬ることなく国運国力の進展をみつつあり 是れ寔に天佑の然らしむる処にして 二君万民尊嚴無比なる我国体に基くものと信じて疑わず」とキリスト教界は天皇制と一体化する。1941(昭和16)年6月には日本基督教団の統理となった富田満牧師が、伊勢神宮を参拝して教団成立を報告するに至った。旧日基は神社参拝と主日礼拝に先行する「宮城遙拝」により天皇を上位の神とした。小塩長老は旧日基の戦争責任は未決とされたが、著者は十戒の第一「あなたはわたしをおいてほかに神があつてはならない」・第六「殺してはならない」・第八「盗んではならない」・第十戒「隣人のものを一切欲しがってはならない」違反、第31回大会の「神社に関する決議」違反、主イエス・キリストの新しい掟「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ22:39)違反、及び悔い改めてないことから有罪と考えている。

そして、日本キリスト教会の現状—牧師・会員減少、財政的危機等—がその罪への神の裁きと覚えてならない。戦争・戦後責任を通して日本キリスト教会の宣教が問われており、悔い改めて真実に隣人を愛する(マタイ25:31~46)宣教がなされているか否かが問題なのである。

3. 札幌豊平教会の「戦争責任告白と新たな宣教への決意」

著者は1969年からの学生時代を札幌北一条教会で過ごしたが、「靖国神社国家護持法案」反対運動は教会の信仰告白と位置付けられて1971年には旧会堂尖塔から「靖国神社国家護持法案反対」の垂れ幕が青年達により降ろされた。私も尖塔へ通じる物置を通ったが、そこで偶然にも戦争中の日曜学校で軍用機を献品するための献金を募る旨の文書を発見し、大きな衝撃を受けた(このことは遠軽教会と滝川教会で発見された一次資料により確認された)。隣人愛を説く日曜学校で人を爆撃・殺傷する軍用機のための献金が行われていたのである!



↑ 滝川教会で発見された艦上爆撃機の絵葉書
左翼下には「報國第3338號 日本基督教団號1陸軍省」の文字。同型機の「報國第3339號 日本基督教団號2海軍省」もあつたことが絵葉書に記された文字から分かる

戦後50年を迎えた時、日本キリスト教会としての戦争責任・戦後責任告白が必要と考えたがそのような動きは無く、たとえ一個教会であっても罪の告白と新しい宣教の決意をせずに進んでいけないとの思いを強くした。なぜなら私た

ちは信仰を先達から受け継いでおり、神ならぬ者を神とし、隣人を殺傷する軍用機を献納するような信仰をも受け継いでいる可能性があるからである。そこで、数年の学習会を経て当教会の社会問題委員会に戦後 50 年となる 1995 年を期して戦争責任告白を行うことを提案し、賛同を得て同委員会で原案を作成した。

同年 10 月の札幌豊平教会全員協議会に「戦後 50 年を迎えての日本キリスト教会札幌豊平教会の罪の告白と新たな宣教への決意（案）」を提案して大方の賛同を得、さらに小会での検討と細部の修正を経て、翌 1996 年 1 月の定期総会に小会から提案され、賛成多数で採択された。

本告白中で、「今後このような過ちが繰り返されることのないよう、神のことばによってたえず改革され、真に神と隣人に仕える教会が形成されることを願います。そのために、この時代を生きる教会としての信仰の告白を吟味し、わたしたちの教会が豊平に建てられた歴史的意義をふりかえり、地域の課題を担います。さらに日本社会がかかえる諸問題の根源にあった天皇制の克服にもとづき、韓国・朝鮮人をはじめとする在日外国人やアイヌの人々とわたしたち一人ひとりの人権が尊重され、民族差別、性差別のない、自由で、公平な社会の実現を宣教の課題とし、教会のかしら・歴史の主であるイエス・キリストへの信仰に生き、神のことばによる信仰の戦いを共にすることを決意します。」と表明した。「豊平に建てられた歴史的意義」とは北星学園創立者サラ・C・スミス宣教師が極めて過酷な生活を送る街区の豊平に日曜学校を開き、貧しい子どもたちに御言葉を伝えたことが当教会のルーツである事を指す。また、「地域の課題」として貧困を想定したが、具体化には時間を要した。親がパチンコをする間、子ども達が教会前で待っているのに稲生牧師家族が気付き、暖かい所で待つよう教会の建

物に招き入れたのが最初で、その子たちを通して地域の子どもの実情を知った。親からかまってもらえない子どもたちと共に、2013 年から夏期学校で学びかつ遊び、「夏休み、宿題やろうぜ！」では宿題を口実に昼食を学生ボランティアの協力を得て共に食べた。大学生の協力のもとに土曜の地域食堂「天使食堂」を、土日は給食がないので月曜の朝食を共に食べる「朝ごはん一緒に食べるとおいしい」を 2016 年 6 月から、日々の生活に困窮する方々に毎週金曜日の「とよひら食堂」を 2017 年 4 月に始めた。コロナ禍にあつて困窮はますます深刻さを増す中、日キ札幌琴似教会、札幌バプテスト教会、聖公会札幌キリスト教会、薄野のジャズバー“デイ・バイ・デイ”、市民ボランティアの協力を得て 300-350 食を、市内 4 か所で手渡し、路上生活の方々に届けている。

神の恵みを共に分かち合いたいとの思いから、2024 年度の教会の目標も「他者のために、地域と共に」として聖霊の導きの下、隣人と共に歩んでいきたいと願っている。

(札幌豊平教会長老)

講師が訴えた「未決の戦争責任」…そして今考えること

佐藤 幹雄

昨年 11 月に開催された「第 54 回靖国神社問題北海道キリスト教連絡会議」で、講師を務められた小塩海平さんが訴えようとしたことは、講演題に端的に表現されていました。その講演題とは、「日本基督教会における未決の戦争責任について考える—私たちは神の前で過去の罪責と現在の課題を問い直す必要に迫られている—」というものです。つまり、小塩さんは、「今なお戦争責任が果たされていない」と言ったのです。「戦争責任は確かに過去の罪責だが、しかし、その戦争責任を今なお果たしていないと

いう事実が、私たちの課題として突き付けら題として突き付けられている」と言うわけです。

1. 三人のキリスト者と「未決の戦争責任」

小塩さんは、講演の後半から、具体的に三人のキリスト者を挙げて紹介しました。お一人は、日本軍の捕虜収容所において、「俘虜」に対する警戒・取り締まりのための「傭人」となり、戦後、捕虜虐待の罪で処刑された朝鮮人・趙文相(チョウ・ムンサン)さん。二人目は、同じく捕虜収容所の「傭人」となった朝鮮人で、戦後、やはり捕虜虐待の罪に問われて10年の懲役刑に処された金完根(キム・ワングン)さん。そして、三人目は、神学生から徴用されて、比島(フィリピン)派遣軍報道部宗教班に配属され、戦後、住民虐殺の罪に問われて巣鴨プリズンに収監された中田善秋さんです。

彼らが、日本軍捕虜収容所の「傭人」に応募せざるを得なかったり、まだ神学生であるにもかかわらず徴用されて比島派遣軍に配属されたりした経緯にも、非常に乱暴な取り扱いがありましたが、教会の「戦争責任」との関係で言うならば、戦後、教会が何もしなかったことを指摘しなければならないのです。中田善秋さんが巣鴨プリズンに収監されていた時も、そこから釈放された時も、教会と神学校は積極的な関わりを持たずしてはしませんでした。そして、それは、彼に対してだけではありません。教会は、金さんのような人に対しても趙さんのような人の家族に対しても、謝罪も償いもしなかったのです。

捕虜収容所の「傭人」として応募することを半ば強制したのは日本という国ですが、しかし、キリスト者である彼らに、積極的にそれを勧め、精神的に後押ししたのは教会です。また、中田善秋さんを徴用したのは日本国ですが、しかし、国に推薦をしたのは神学校です。それなのに、そのことについて、責任を果たすどころか、具体的な罪責の表明さえしていないのです。講師の小塩さんは、それを、「日本キリス

ト教会」の「未決の戦争責任」として話されたのですが、すべてのキリスト教会が果たしていない…そして、果たさなければならぬ責任なのだと思われました。

2. 天皇制の価値観を共有してしまった教会

あの時代の支配的な価値観は、「天皇を絶対とすることによって、その天皇の赤子である大和民族を優等民族と考え、劣っているアジアの人々にとって、天皇の支配の下に入ることが幸せなのだ」というものでした。独りよがりな傲慢な考えです。しかし、キリスト教会の大勢もまた、その価値観を共にしてしまったのです。どうしてそうなったのか…史料に当たってみると、その流れを見ることができます。

例えば、1942(昭和17)年11月に、天皇が宗教団体の代表者を皇居に招いて謁見しました。そして、その招かれた代表者の中に、日本基督教団の富田満統理がいたのです。仏教団体と比べて信者数も少なく、「敵性宗教」と見做されていたキリスト教の代表者が、他の宗教団体の代表者と肩を並べる形で「謁見の榮譽」に浴したということで、富田統理は、いたく感激してしまっただけです。さっそく、各教会の主管者(牧師・伝道師)宛てに、こんな「統理者令達」を送りました。

「畏くも、聖上陛下には特別のお思召しを以て去る11月26日各宗教団体代表者に拝謁を賜り、本職も亦教団統理者の資格に於いてその光榮に浴したるは本教団教師及び信徒一同の光榮にして洵に恐懼感激に堪えざる所なり。

此の際、本教団所属全教師は戦時下宗教の上に垂れさせ給う大みどころを拝察し奉り、ますます宗教報国の決意を新たにし広大無辺なる聖恩に応え奉らんことを誓い、且つ益々一致協力皇国の為大東亜共栄圏建設を目指して匪躬の節を尽くされんことを望む。」(現代仮名遣いに変更。以下同じ)



↑ 紀元 2600 年記念事業として 1940 年“外地”にも、北京神社、建神廟(満州国)、南洋神社(パラオ)を創建した。写真は南洋神社創建祭の様子を伝える写真雑誌

こういう「令達」を出し、日本全国はもとより、中国や朝鮮においても、「聖旨奉戴基督教大会」を開催することを決定したのです。こうして、「大東亜共栄圏建設のために戦争を完遂する」という天皇の聖旨を戴いて、キリスト教会もそれに邁進していくことを誓ったわけです。

さて、紙面が限られているので、もう一つだけご紹介するとすれば、『日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰』のことに触れないではいられません。ただ、長い書簡ですから、ここでは、その中の一つの文だけを紹介します。

「全世界をまことに指導し救済しうるものは、世界に冠絶セル万邦無比なる我が日本の国体であるという事実を、信仰によって判断しつつ我らに信頼せられんことを。」

この文の前も後も、こんな調子の文章が続いているのですが、そのような書翰を、1944(昭和 19)年 4 月(イースター)に、占領地の各言語に翻訳して送ったのです。これが、日本が軍事支配している国のキリスト教徒に、日本の支配に心から服し、協力するようになることを願って送った書簡だということです。驚くほかありません。

ただ、このような考えは、この時代になって生まれてきたものではありません。日本が朝鮮を併合した 1910 年に、日本組合教会は朝鮮人

伝道の開始を決議し、翌年には渡瀬常吉を責任者にしてソウルに赴任させたのですが、その渡瀬が、「朝鮮教化の急務」という論文の中で、こう書いているのです。

「朝鮮人を教化せんとする宗教家は、朝鮮人を、人類同胞の立場より、これを単に宗教的信仰に導くというにとどめず、更に一步進めて、日本と併合せられた朝鮮人として、その最も幸福なる道行きはいかにすれば良いかということを考え、多少彼らの心中には反抗心があっても、それを解き明かして、日本国民として立つ覚悟に到着せしめねばならぬ。」

要するに、朝鮮人を日本の支配に従順な人間に教育しなければならないし、それが朝鮮人にとって最も幸福なことなのだとやっているわけです。

3. 教会は時代の価値観にすり寄っていないか

「あの時代は、教会を国家の弾圧から守る為に、仕方なくしたのだ」という弁明がなされてきましたが、まったくの嘘ですね。残された史料から見えてくることは、積極的に、自ら進んで国策に協力していった教会の姿です。「協力」と言うより、国家の価値観と同じ価値観を持って動いていた教会の——教会指導者たちの——姿です。その事自体が、「何をしたか、何をしなかったか」とは別に、教会の第一義的な罪責であったと言わねばなりません。

しかし、同時に、つくづく思うことがあります。それは、私たちは今、多くの人々が抱えている価値観に引きずられることなく、自分の主体を賭けた価値観を抱いているのだろうかということです。別な言い方をすれば、教会は、昔から今に至るまで、その時代時代において、力ある人や大勢の人達に認められることを願って、スマートに考えを変えてきたということはないのでしょうか。私は、例えば、教会の中でどんな人が重んじられ、教会政治の中で何が重んじられてきたかを見ると、そのように疑わざるを得ないのです。「認められたい」と、その時

代の優勢な価値観を自らの価値観としていくことが変わらない限り、私は、深い所で戦争責任を果たしていくことは難しいだろうと思っているのです。（日本基督教団 隠退教師 靖国・天皇制問題情報センター運営委員）

＜報告3＞ ヤスクニ・社会問題委員会

2023 北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会 公開学習会Ⅱ

日時：2024年2月23日午後1時～3時

講演：「近代家族の象徴としての聖家族と
天皇家族一家族・キリスト教・天皇制」

講師：小林昭博さん(酪農学園大学教授)

会場：札幌琴似教会（ウェブ参加あり）

公開学習会を視聴して

高見 早苗

ヤスクニ・社会問題委員会は、LGBTQへの理解を促すための公開学習会を開催してきました。2019年2月24日の第1回学習会では、男性同性愛者であることをカミングアウトした上で牧師に任用された、日本基督教団川和教会の平良愛香牧師のお話を聞くことが出来ました。キリスト教会内の同性愛は罪であるとする考え方ゆえに「キリスト教を信仰するから苦しんでいる同性愛者」の苦悩には、クリスチャンである自分自身もくみしていることを自覚させられました。平良牧師の「神はすべての人を愛する」という確信や「神様がつくったものに不良品はない」という言葉は、私の心にクリスチャンとしてセクシャリティの課題に向き合うための一つの錨をしっかりと降ろしてくれました。

2021年度は、淵上綾子氏（トランスジェンダー当事者、北海道議会議員）を講師とした『LGBTQをとりまく現状と課題』では、淵上氏

の実体験を通して、家族、学校、職場、社会などで理解を得ることのできない悩み、苦しみを知り、LGBTQの人が身近にいないのではなく、不利益や差別をおそれカミングアウト出来ない社会の現状に気づかされました。道議会議員として、性的マイノリティだけでなく、女性、高齢者、障がい者、アイヌの人々、外国人などの人権の課題に取り組まれている姿からは、一人一人が社会の変化のためにアクションを起こす勇気を持つ必要性を実感させられました。

2022年度は、小林昭博氏（酪農学園大学教授／日本基督教団北海教区平和部門委員会委員）を講師に招き、『同性愛は罪か？—同性愛／同性間性交を罪とする聖書テキストを読む』と題して、実際に聖書テキスト（本文）の釈義を頂きました。『同性愛と新約聖書—古代地中海世界の性文化と性の権力構造』風塵社、『クィアな新約聖書—クィア理論とホモソーシャル理論による新約聖書の読解』風塵社などの著作がある講師から、キリスト教のLGBTQ+差別の問題を学べたことは、性的少数者への差別を内包した表現や解釈から解放された信仰理解と実践への変革を促すものとなりました。

「クィア(Queer)」とは、「風変わりな」「奇妙な」など、もともとは侮辱的にゲイを表現する言葉であったが、20世紀以降に性的少数者が中心となって、性の多様性を肯定的に主張する言葉として浸透してきた経緯がある。

ただし本講演の「クィア理論」では、性的少数者を肯定的に捉えた上で、これを包括的扱うものではない。むしろ固有性や差異を意識化していくことで個のアイデンティティを確認して行くものである。(編集者)

以上の3回の講座に続き本年度は、再び小林昭博氏を講師に招き「近代家族の象徴としての聖家族と天皇家族一家族・キリスト教・天皇制」をテーマに開催されました。「家族」、「キリスト教」、「天皇制」は、日常的な生活の中で意識するとならないにかかわらず、私自身の思考や行動を規定するものであると認識し、常に心に留めざる負えない課題を含むものと捉えています。

した。その「家族」「キリスト教」「天皇制」を「近代家族の象徴としての」「聖家族」と「天皇家族」の視点から学べるということが新鮮に感じました。「近代家族の象徴としての天皇家族」という概念は、「ヤスクニ通信」（日本キリスト教会靖国神社社会問題特別委員会）を読むことや、社会生活の中で感じる生きづらさに向き合うことで多少は学べているように思います。一方、「近代家族の象徴としての」「聖家族」という視点は私の中にはまだ構築されておらず、新たな学びへの好奇心を呼び起こしてくれました。クリスチャンとしてキリスト教会に繋がる中で感じている違和感や疑問、「教会もまた、人の作った制度や思想、伝統や慣習などに取込まれたままではないか？」という思いを、整理して見つめるためのキーワードになるのではないかと感じたからです。また、このテーマが今までの3回にわたるLGBTQ関連の学びと、どのように繋がっているのか興味が湧きました。当日の講座の内容は、小林氏の膨大な研究成果に基づいた学術的なものでした。「近代家族の象徴としての聖家族と天皇家族一家族・キリスト教・天皇制」というテーマの理解に向けて、

1. 近代国家としての日本
2. 日本の近代家族
3. 聖家族—ルカ降誕物語のクイアな聖家族
4. 近代家族の象徴としての聖家族と天皇家族 一家族・キリスト教・天皇制

と、順を追って解説されました。その中で、クイア理論によるルカ福音書の受胎告知と降誕物語の読み解きは、「クイア」という言葉の定義や「クイア理論」を知る機会になり、人間が作り上げた聖家族像から離れ、聖書そのものに現れる神、イエス、マリア、ヨセフの関係性を認識させてくれました。以下に講師のお話の要約を記します。

1. 近代国家としての日本

大政奉還に伴い誕生した明治政府は、西洋の帝国主義諸国の「強さ」を唯一絶対神信仰を唱えるキリスト教にあるとみて、それを模倣し天照大神という唯一神を作り出し、キリストになぞらえて天皇を現人神とする国家神道が生まれ天皇制帝国主義への道を歩んだ。このとき、近代日本のキリスト教は「天皇ではなく基督」と抵抗することはなく、国家神道に迎合していった。このように、日本の近代国家の枠組みの土台に、キリスト教が多大な影響を与えている。

2. 日本の近代家族

西洋社会では、資本主義と産業革命を背景に近代家族の男性は外部労働に、女性は主婦業に従事するというジェンダーロールが生まれ、「資本」（市場）と「家族」、双方を治める「国家」からなる三位一体の近代社会が形成された。日本では、家父長制に基づくイエ制度に西洋の近代家族観が影響を与え、日本独自の近代家族が誕生した。天皇絶対主義的近代国家体制の成立に伴い、国家を家に準え、天皇をその家父長とする家族国家主義が生まれ、国家（家族国家主義）にイエ制度（小家族制）が従属するように再編成された。

芸娼妓を会員と認める愛国婦人会と、それに反対した『婦女新聞』の内紛は、天皇を家父長とする家族主義国家に属するのは、「個人」ではなく「家族」という単位であることを見せる。キリスト教的一夫一婦制度の性規範に影響を受け、「主婦」（妻 / 母）としては「家族」に属さない芸娼妓を排除することは、「国民」を選別・分断し「近代家族」の形を作ることでもあった。

1900年に東京・四谷に設立の双葉幼稚園は、キリスト教ミッションからの寄付により運営されたが1909年からは天皇・皇后の下賜金による運営となった。「上流階級」の女性たちの寄付に

より支えられたが、キリスト教と天皇制の慈善に基づく相補関係（共犯関係）を築く先鞭となった。双葉幼稚園の救貧活動は、「都市下層」の貧困家庭の経済基盤を安定させ近代家族に組み入れていった。

3. 聖家族—ルカ降誕物語のクイアな聖家族

クリスマス物語の幼な子イエス、母マリア、父ヨセフは、「聖家族」として西洋キリスト教世界の「理想の家族」や「規範的な家族」を表現している。しかし、ルカ降誕物語を読み解くと、「理想の家族」や「規範的な家族」は存在しないことがわかる。



マリアに受胎が告知され、聖霊による処女懐妊でイエスの父は神のみである。ヨセフとイエスには血縁関係はない。ヨセフがイエスの父とされるのは、「慣例だった」として、イエスには二人の父がいるというクイアさが残されている。

「しかし、マリアはすべてのこれらの出来事をしっかりと保ち、その心のうちで思いめぐらしていた」（ルカ2：19）を原意で読み解くと、自分の妊娠と出産に関する出来事を思い出すたびに混乱して煩悶するマリアの様子が浮かぶ。イエス誕生の場面では、神とヨセフという二人の父の影は薄く、マリアはシングルマザーのようであり、イエス、マリア、ヨセフの三人からなる「聖家族」という「理想の家族」や「規範的な家族」の姿は存在しない。

イエスと神との霊的な父子関係は通常の「家族」に納まらない「クイアな父子」であり、血

縁関係に無いイエスとヨセフも「クイアな父子」である。マリアは「聖霊」により懐妊しイエスとは血縁関係にはなく、イエスの母であり、母ではないとなり、「クイアな母子」なのである。このように、ルカ降誕物語にはイエス、神、マリア、ヨセフの四者（三人＋一神）から成る「聖家族」があり、それは「理想の家族」や「規範的な家族」ではなく「クイアな家族」である。幼な子イエスを中心とする幸福な「聖家族」を聖書に読み込み、押しつけてきたのは、「一夫一婦制」という「対幻想」や「近代家族」という名の「家族主義」に囚われているわたしたち自身ではないだろうか。*講師の言葉

4. 近代家族の象徴としての聖家族と天皇家族—家族・キリスト教・天皇制

戦後、昭和天皇家の家族写真、皇太子時代の平成天皇（明仁）の成婚祝福などの写真や映像により、戦後民主主義の平和を象徴する理想的な近代家族のロールモデルとしての天皇一家がアピールされ、天皇・皇太子が男性のジェンダーロールを、皇后・皇太子妃が女性のジェンダーロールを担い、一夫一婦制と「夫・妻・子」という近代家族のロールモデルを演じている。それは、日本社会のジェンダー規範や異性愛規範、単婚制と次世代生産のための「正しい家族」の象徴として、「夫・妻・子」（父・母・子）で構成される「正しい家族」の規範に属さない者、とりわけLGBTQ+（LGBTIQAP+）がクイアな存在として排除される状況を生んでいる。

現在、核家族は5割程度にまで減り、近代家族は終わろうとしているが、現代日本の保守層や米国の宗教的右派（福音派）などは、その事実を認めない。これらの保守層が一夫一婦制と「夫・妻・子」（父・母・子）を正しい家族とする家族主義でつながり、夫婦別姓やLGBTQ+や「ジェンダーとセクシュアリティのイデオ

ロギー」をヘイトの対象にし、「家族」を破壊したのが「フェミニズムとLGBTQ+」であるとしている。

これは一部の保守層やカルトの問題だと言って切り捨ててしまえる問題ではない。「聖家族」を理想化し、「神の家族」という名の「家族教会観」（堀江有里）を内面化してきたキリスト教が今まさに問われている問題だからである。***講師の言葉**

近代国家としての日本の天皇制帝国主義は、キリスト教の影響を受けていること、天皇を家父長とする家族主義国家の「近代家族」の形成には、キリスト教的一夫一婦制度の性規範が影響していることを知ると、現代の日本社会で「異質な家族」、「正しくない性の在り方」などとして、差別や排除の対象とされる人々の苦しみとキリスト教とに関係がないとは言えませんが。

また、聖書から本来のメッセージを注意深く読み解くことなくしては、平良牧師の「神はすべての人を愛する」という確信を自身の確信とすることはできません。平良牧師は、社会の無理解からの苦しみだけではなく、キリスト教内の同性愛は罪であるとする考え方からも二重の苦しみをうけました。

対照的に、私自身は、家族主義国家の「近代家族」像としての「天皇家族」と、西洋キリスト教会の「理想の家族」や「規範的な家族」としての「聖家族」という二つの「正しい家族」の象徴に影響をうけています。

今回の学びで得た、「近代家族の象徴としての」「聖家族」という視点は、今後、教会内でのジェンダーとセクシュアリティの課題を見つめるための的確なキーワードとなりました。

（滝川教会 信徒）

講師の小林先生より講演原稿を頂戴し、お読みくださる方々への配布をもご了解いただきました。御希望の方はお知らせください。連絡先は2ページ参照

<報告4>

外国人住民基本法の制定を求める 全国キリスト教連絡協議会（外キ協） リレー学習会 2023

日時：2023年10月27日 18:00～20:00
会場：カトリック北海道教区センター
講演：「暴力にあらがいのちのことばを紡ぎなおす—マイノリティとともにあるキリスト者の道—」
講師：金 迅野（キム シンヤ）さん
（在日大韓基督教会横須賀教会牧師）

講演「暴力にあらがいのちのことばを紡ぎなおす—マイノリティとともにあるキリスト者の道、敵意と差別をこえて—」を聴いて 西本 詩生（にしもと しなる）

昨年10月末、北海道外キ協と日本福音ルーテル教会社会委員会の共催で開かれた学習会に参加しました。講師は在日大韓基督教会横須賀教会の金迅野（きむ しんや）牧師で、「暴力にあらがいのちのことばを紡ぎなおすマイノリティとともにあるキリスト者の道」という題のお話でした。直近の入管法・技能実習生制度の現状、そしてそれらに振り回されてしまう外国籍の方々を視野に入れた講演でした。

「点」から「線」へ

講演が開催された10月末は、パレスチナ・ガザにおける軍事攻撃が本格化する最中でした。その時期の報道は、ガザの人々を極限まで追い詰める容赦ない攻撃は、イスラエルの国家防衛として物語られるものが少なくありませんでした。講演の聴き手の私たちにまず促されたのは、ガザで起きている紛争を「点」の出来事として捉えるのではなく、歴史の「線」の中にある事柄として見ることでした。つまり、「点」の出来事として捉えるのであれば、イス

ラエル軍の攻撃は、ハマスによる攻撃に対する反撃として語られることとなります。対照的に、「線」の中にある「点」として捉えるのであれば、「なぜこれが起きたのか」を探ることとなります。歴史を見つめると、パレスチナ人に対する構造的・意図的な人権侵害が蓄積されてきたことを無視できません。さらにさかのぼると、イスラエル国家建国の際、パレスチナ人が難民とされ、結果的にガザ地区とヨルダン川西岸地区に人々が閉じ込められてしまった歴史が見えてきます。どのような出来事であろうと、まず注目されがちなのは「点」としての出来事であるのですが、そこに至るまでの歴史の「線」に視野を拓けることの重要性が最初に強調されました。

help me Jesus

次に紹介されたのは、入管当局に収容されていたある難民男性が強制送還される衝撃的な動画でした。その男性の弁護士の了承を得て動画が紹介されました。男性は4-5人の入管管理局員に囲まれ、出国命令が下されたことをしきりに伝えられる様子が映し出されていました。国に戻ることは命を失うことであることを男性は何度も説明し、出国を拒み続けるものの、その訴えが聞き入れられることはありませんでした。最終的には、入管管理局員5-6名に、足や腕の自由が抑えられ、体ごと運ばれ、飛行機に向かう様子で動画が終わりました。飛行機に載せられる直前に、その男性は「help me Jesus」(イエス様、助けて)と叫んだそうです。ただでさえ、動画で映し出されている様子は生々しいものでしたが、神の助けを求めるその姿は今でも言葉に上手く表せない映像として記憶に残っています。講演の題に含まれている「キリスト者の道」は何であるのだろうかと言ってくるものです。

日本は1982年に国連の「難民の地位に関する条約」に加盟し、表向きには、行く先を失った人々を受け入れる姿勢を示すことになりました。

しかしながら、他国に比べると難民申請者の認定率が著しく低いことは明らかです。過去10年を見ると、日本の認定率は0.2%~2.0%に留まり、条約に加盟している諸国との違いが際立っています。



↑ 国連難民高等弁務官事務所データ (法務省発表)

この統計を見ただけでも、日本は、難民の受け入れを意図的に狭めていることが疑われてもおかしくありません。昨年6月に入管法は改悪され、強制送還がさらに厳格化されました。紹介された動画が訴えてくるように、強制送還は命取りになりかねない処置であり、その様子は日本社会の陰を表しているように思えてなりません。「不必要」とみなされた命を切り離す、醜い影です。

講演の講師の金牧師は、在日コリアン2世の父を持ち、在日コミュニティの中で語り継がれているある発言を紹介してくださいました。1965年の法務省入国管理局参事官が、在日コミュニティの法的地位に関してこのように発言したのです、「煮て食おうと焼いて食おうと自由」と。この思想が、形を変えて、現入管法に促される強制送還に顕著に表されていると言わざるを得ません。歴史を通して貫かれる排他的な「線」を如何に変革していくのが課題であるのです。

この課題を乗り越えていくために、金牧師が提案したことは、正直私にとって驚きでした。というのも、金牧師は、人格を貶めるヘイトを

受けて来たことについても触れていました。自らの経験の中で、暴力を受けた時に、それに対して暴力で立ち向かったこともあったと発言していました。けれども、それは必ず行き詰る選択であることに気づかされ、イエスが弟子たちの足を洗う姿から学ぶことが提案されたのです（ヨハネによる福音書13章）。暴力に立ち向かう策はイエスのように仕える姿勢に秘められていると言うのです。なぜこの提案に私が驚いたかということ、在日の方々は社会構造上極めて不安定な立場に置かれ、それ故に貶められてきたと言わざるを得ないからです。知人の在日コリアン2世の方のお話を伺ったところ、帰化認可を得られなかったことを期に、自らの命を取ってしまった兄のことを痛んでいたことを思い出します。このような構造を作り上げる社会の一員として、「ごめんなさい」の一言で済まされるような事柄ではないことを教えられた瞬間でした。このような歴史的背景があるにも関わらず、仕えることを金牧師が提案されたのは、全身全霊の重みがかかった愛情の訴えであることに気づかされるのです。それゆえに、驚き、感動を覚えました。

今回の講演で受け取ったことを絞るとしたらこの二つになると思います。①「点」の出来事から、歴史の「線」に視野を拓けること。②神がなさる変革に期待して、命に仕えること。貴重な講演に参加できたことに感謝です。二つの学びが生かされねばと思われています。

(札幌バプテスト教会牧師)

技能実習制度廃止と育成就労制度創設に伴って、永住権を持つ外国人数の増加を制限する方策として「永住権取り消し法案」が3月15日国会に上程された。既に永住権を持つ人ばかりの問題ではない。日本でも苦境に立たされつつ安心の生活を求める難民申請者や仮放免の人たちが、家族分断や強制送還による母国での迫害に遭うことが一層懸念される。人口減少・労働人口の減少・少子化・貧しくなった日本が、世界市民とどう生き合うのか。心の鎖国を解こうではないか…。そして私たち内にも“国”民であることから解き放たれた意識を養っていきたい。地球に生きる民が共生できる世界を目指したい。偏狭な国家主義は、結局「国」をも守らないであろう。(編集者)

＜特別報告1＞ 「慰安婦」問題 オンライン学習会に参加して 松本 昌恵

語り部の言葉に出会って

戦後50年(1995年)、TVで沼田鈴子さんがおっしゃった「知らないことも罪」の言葉にハッとしました。知らなければ、伝えることも教えることもできません。

沼田鈴子さんは広島原爆の語り部です。原爆をうけて左足を切断して奇跡的に助かりながらも、原爆の差別の恐怖から隠し続けていましたが、原爆を経験したことを語ることがご自分の使命と認識して語り始められました。「知らないことも罪なのです」と語られた言葉を聴いて、私が小学6年生の時に、原爆の写真集を見て気持ち悪い、汚い、もう過去のことと、戦争についても知ろうとしなかった私は、頭を金槌で殴られたような気がしました。

平和の尊さ、戦争の愚かさ、いのちがかけがえのないことを子どもに伝えることは、母として一番大切な役目であったはずなのに、それをせずつき来たことを悔やんでも悔やみきれないほど後悔しました。その時から知ろうと心がけています。

「知らないことの罪」「知ろうとしない罪」
「知ってから伝えない罪」。

身近なところでの出会い

私は1994年に初めて教会に行き、1996年イースターに洗礼を受けました。その苫小牧教会には、伊藤道子さんがおられ、伊藤さんは1996年10月「北海道・従軍慰安婦謝罪クリスチャン基金」を開始、1998年6月に東京での「戦争と女性に対する暴力」日本ネットワーク発足に合わせて、「……クリスチャン基金」を「戦争と女性への暴力を考える」北海道キリスト者の会と改名し、事務局として「慰安婦」問題、戦争と女性への暴力についての活動をされ、黒木

あい牧師（当時）のご指導のもと、「戦争と女性に対する暴力」日本ネットワーク代表の松井やより氏の講演会開催。松井氏は、韓国にて慰安婦の過去・現在の生活を直接ハルモニから伺い、その様子を写真に撮って私たちに語られました。そのような「慰安婦」の方たちに寄り添う伊藤さんの姿を思い出して学習会への参加を決めました。

オンライン学習会とその起こりを知って

「慰安婦」問題オンライン学習会は2023年10月と12月に実施されました。そこで初めて、日本キリスト教会の「慰安婦」問題への取り組みの始まりについて解説を聞きました。1990年第40回大会で『韓国、朝鮮の教会に対して行った神社参拝強要についての罪の告白と謝罪』を採択、翌年に大会議長が韓国の諸教会を訪問し謝罪。韓国の教会からは「慰安婦」問題への取り組みの要請があった。そうして始められた「慰安婦」問題の取り組みであったが、歴史を導かれる神さまから私たちが問われている課題だと、オンライン学習会で話されたことが心に残りました。

今も、戦争で同じように女性たちが性暴力に苦しんでいることを踏まえて、そのような視点を大切にして今後もオンライン学習会に参加したいと思っています。皆様の意見を聞いていると視野が広がって新たな気づきを与えられ有意義な学びの時になりました。

さらに、学習会が終わると参加者の感想が送られてきて多角的な視点の感想に目がひらかれます。例えば、「日本軍『慰安婦』の表題では若い人にはすでに遠い過去の事として無関心であろう。

「若い人達にどう伝えられるのか」との問いかけに、「誰もがぶつかる難問。現在の教科書から『慰安婦』という言葉は削除されたので、全く知らないのは当然。よほどの出会いがなければ過去の歴史を学ぶ必要を覚えないので

はと思う。以前、講師をされた方が『凍土に鍬を打つような作業だ』と話したが、諦めてはならない課題だと思います、と。

渡部静子牧師（宇都宮松原教会）からは、物事を考える視点が大事。「初めは韓国教会からの問いかけ、要請であったかもしれないが、『慰安婦』問題は『教会形成の問題として神さまから問われていることだ』との発言を頂き視点を明確にされた。」と。

『取り組む会』は、政府への働きかけと、同時に被害者の方々に寄り添いつつ、日本キリスト教会の中にこの問題に関する理解と協力の輪を広げる働きかけをしてきた。今、被害者の方々に生存者はほんのわずかになってきた。彼女たちの無念の想いを汲み取るならば、二度とこんな想いをさせることのない日本にして欲しいということであるはず。それは私たちの願いでもある。」

「今、日本政府に対して、戦争を始めさせないことの働きかけこそが求められることではないか。

国民全体で『戦争は絶対に反対』の意思を示さないと、また78年前と同じことが始まる。それも、今度は核兵器まで登場すると思わされてくる」と。

「今後も継続して、戦争の悲惨さ、人権侵害を避けられないことを伝える一人でありたい。今まで向き合うまで至らなかったが学習会に参加して、神社参拝強要、性的奴隷問題は、最も非人道的なことで、最も心に問われるものであった。「慰安婦」問題等の日本の過去の歴史問題が反省されずに今日に至っていることは、その問題が現在の社会問題につながり、現在の女性の社会進出や反戦平和に影響しているのではないかとの問いにはっとさせられた」と。

「ロシアやウクライナに対する加害は知っていても、日本が東アジアの人に対してなした加害は知らない。戦争を知らない世代であっても、日本キリスト教会憲法にあるように『歴史

的責任を負う』教会であり続けたい」等々。このように多くの感想が寄せられています。

それらのご意見をお聞きしながら、今後も継続して学び、戦争の悲惨さ、戦争は人権侵害を避けられないこと、聖戦はないことを伝える者でありたいという思いを強く与えられています。

産業「慰安婦」

従軍「慰安婦」とは違いますが、夕張には強制連行された多くの朝鮮人労働者が炭鉱での過酷な状況で働かされ、その生産性の向上や逃亡防止のため、さらに同胞の女性たちをまやかしの言葉で連行して同胞を相手に人間性無視の恥辱を与えました。産業（労務）「慰安婦」と呼び、今ようやくこのような人々へも光があてられるようになってきました。

これは北海道内だけではなく全国に広がっていたのです（夕張から歴史と平和を考えるフィールドワーク資料より）。

性接待を強いられた女性の勇気

2024年1月18日、性被害証言者の佐藤ハルエさんが亡くなりました。

敗戦後の混乱の中、満蒙開拓団の幹部から「団を守るために」との理由で他の女性団員らと共にソ連兵に対する性接待を強いられ、帰国後は汚れた女として差別をされました。「二度と戦争が起こらないように」、「女性が犠牲にならないように」、体験を实名で証言されました。「戦争は男だけじゃないよ、犠牲になるのは女や子どもだよ。どんなことがあろうとも、わたしなんか恥ずかしい目もしたし、一步間違えば死ぬ境を通ったのに、口をつぐんでいたら駄目でしょう。なんであれ、歴史や体験した悔しかったことであろうとも、しゃべって残していくのが人間の社会の歴史じゃないですか」と、生前の声が残っていました。

「慰安婦」問題オンライン学習会は、歴史を導かれる神さまから私たちが問われている課題

に向き合い、新たな戦争被害者を起こさせないための学習会だと思っております。

会の案内に、「この会は初めからカリキュラムが組まれているわけではなく、参加者と作っていく会です。ぜひ加わって、共に学びませんか？」とありました。

「知らないことの罪」「知ろうとしない罪」

「知って伝ええない罪」を自分に問い、歴史を導かれる神さまから問われている課題と一緒に向き合う学習会に参加します。

（苫小牧教会信徒）

古代ローマでは売春を生業とする女性を軍隊に供給したという。19世紀半ばまでは、軍隊に帯同する非戦闘員は、兵士の家族である場合も多く、キャンプフォロワーと呼ばれ、看護・炊事・洗濯・裁縫等に携わった。家族の帯同ができなくなってから、兵士の士気向上を目的に軍用装備品とでもいう位置付けで軍と共に行動する女性の存在が一般化した。これに伴って軍隊内における性病の蔓延や故郷への持ち帰りが問題となり、国や軍が女性の管理をするようになった。そこに軍が調達・管理する「従軍慰安婦」や国の「公娼制度」の始まりがある。軍の「慰安所」には、民間業者による斡旋（人身売買や詐欺）また国や軍によって女性が調達された。敵国や占領地域の女性へのレイプを報復として行うよう暗に推奨する国もある。戦争は民を極度の緊張と抑圧に陥れるが、殊に騙されて連れてこられ、兵士の性的相手を強いられる女性の人格は全く否定されている。この事態を問題視する声が上がると、『従軍慰安婦』の問題が、軍隊の必要や性病管理の観点ではなく、初めて“女性の人権”問題として取り上げられたが、その歴史は浅い。最も抑圧された人権状況は軍隊の中で展開し、特に女性において極まる。その意味で、『従軍慰安婦』問題は、女性の人権問題の要ともなる。（編集者）

日本軍「慰安婦」問題と取り組む会ご案内

オンライン学習会は、
①日本キリスト教会に連なるキリスト者として謝罪の気持ちを忘れないために、
②韓国や台湾をはじめアジアの一員として、交わりを形成するうえで欠かせない近隣諸国との近現代史を知るために、
慰安婦問題を初歩からわかりやすく伝えたいという思いから始まりました。
「取り組む会」はこれまで、賠償責任問題を巡り、元「慰安婦」の方々に寄り添い、共に戦ってきました。しかし当事者の多くが世を去る中で、「慰安婦」問題を風化させないための取り組みにこれまで以上に力を入れていこうとしています。

〈第三回目の学習会〉

2024年5月28日(火)午前10時～

- ① 紙芝居「慰安婦にされた少女たち」上演
- ② にゅうすバックナンバーを通して聖書に聴く

連絡先：日本キリスト教会宇都宮松原教会
matsubara.chccj@gmail.com

氏名・メルアド・電話番号・(教会名)をお知らせください。多くの方のご参加を…。

<報告5> ヤスクニ・社会問題委員会

2023年度 靖国神社問題全国連絡協議会

日時：2023年10月17日 19:00～21:00

会場：日本キリスト教会蒲田御園教会

主題：「第一次資料から見た日本基督教会
—遠軽教会・滝川教会資料を中心
に」

パネリスト：渡辺輝夫（夕張伝道所牧師）

畑 知佳（遠軽教会牧師）

稲生義裕（札幌豊平教会牧師）

コーディネーター：小塩海平（東京告白教会
長老・大会靖国神社問題特別委員会委員長）

「戦時下の教会資料発掘報告」

畑 知佳

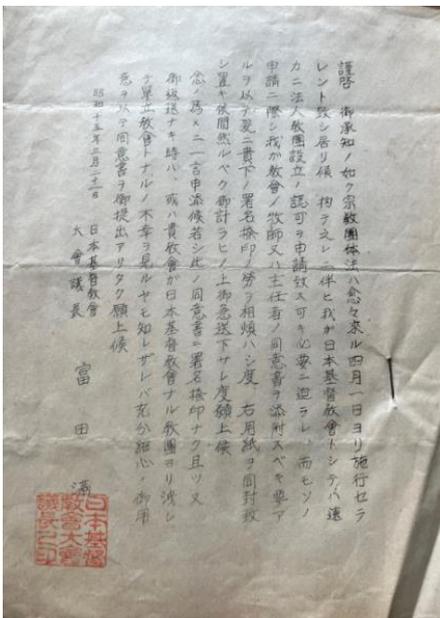
はじめに

遠軽教会の倉庫と化している二階の一室から、1940年施行の旧宗教団法に関する資料の一式が見つかりました。これは、かつての長老が個人的に取り分け、戦後の宗教法人法に関する

資料と共に整理したもののようですが、旧宗教団法全文や認可要請の為に役場へ提出した書類の写しのほか、当時の大会議長富田満の教団加盟申請に関する

通達文書や日本基督教団第一部

↑ 昭和15年3月21日付、日本基督教會大會議長富田満名で届いた文書。「我が日本基督教會トシテ速ヤカニ法人教團設立ノ認可ヲ申請致ス可キ必要ニ迫ラレ…」と教団加盟申請を促す。(ガリ版刷り)



会報などが含まれていました。

私は当時の第一次資料に直接触れたのは初めてでしたので大変驚きましたが、これをどう取り扱ってよいか分からず、暫くそのままに放置していました。しかし、やがて中会ヤスクニ・社会問題委員の一人に選ばれ、委員長の渡辺輝夫牧師に資料の存在を伝えることができました。けれども、まさか大会靖国神社特別問題委員会でもこれが取り上げられ、昨年10月には同委員会主催の全国協議会で発表することになるとは思いませんでした。というのも、こうした歴史資料に関して既に検証された見識について、私の方が先輩方から教えて頂きたい、またそうして頂けるものだと考えていたからです。私は戦後40年ほど経って生まれた世代ですが、日キにおける靖国問題の取り組みはそれ以上の歴史があります。ですから、きっと先輩方はこうした資料も見慣れているのだろーと思っていました。でも、そうではないということが分かり、二重の驚きでした。

こういうわけで、委員会として初めて行うこととなった第一次資料の掘り起こし作業に私自身も携わることとなり、特に私は最初に見つけた資料の他にどんな資料が遠軽教会に残っているのかを一から調べ直すこととなりました。そうして、当時の週報や小会及び総会の記録、集会案内や青年会記録などを見出すこととなりました。

その中でも週報に残された記録は、当時の礼拝の様子は勿論、会員の動向や集会状況、大中会からの連絡事項などの多岐に渡る情報が詰まっています。とても貴重な資料です。そこで、ここからは週報の情報を中心に当時の遠軽教会の様子をお伝えしたいと思います。

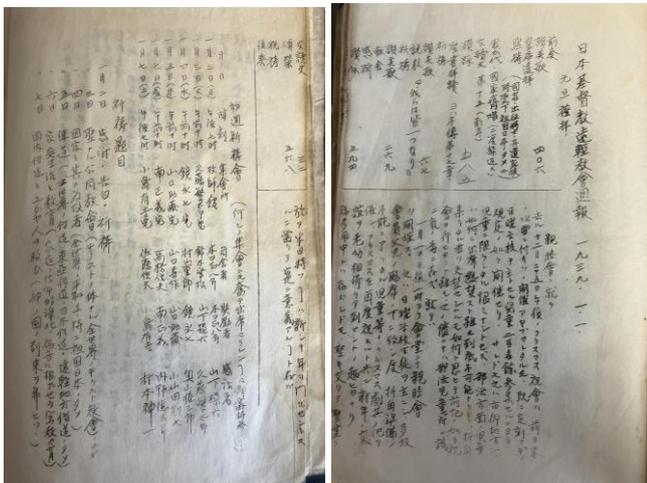
教会の報国実践

—前線・銃後一体の奉仕の具体例—

1、礼拝における国民儀礼の実施

まず当時の礼拝についてです。皇居遥拝と国歌斉唱が国民儀礼*として礼拝式文中に挿入さ

れた最初の週報は、1939年1月1日の元旦礼拝で、同年4月7日の旧宗教団体法成立を直前に控えた時期でした。



↑ 1939年元旦礼拝、初週祈禱会の週報。遠軽教会においては、国民儀礼が最初に入れられた週報

この時の礼拝では、皇居遥拝と君が代・国歌斉唱の間に黙禱(国君、出征將士、其遺家族、時変下祖国日本ノタメニ)」も追加されています。さらに1月2日から7日にかけて行われた初週祈禱会の題目には、「国家と其の為政者(全世界ノ平和並特ニ祖国日本ノタメニ)」や「伝道(全世界ノ伝道、東亜伝道、日本伝道、遠軽地方伝道ノタメニ)」が掲げられています。

1937年7月7日の盧溝橋事件を契機に勃発した日中戦争が長期化し、やがて第二次世界大戦に拡大していく時変下に、政府は1938年11月3日「東亜新秩序」声明(第二次近衛声明)を出しています。これが後に「大東亜新秩序」の構想に発展していきますが、中国そして他のアジア諸国を欧米諸国の奴隷支配から解放していくための大義ある戦争という政府や軍の主張に教会も賛同して疑わず、祖国のために奉仕することが世界における日本基督教会の使命であるとして邁進していくのが、この頃からのようです。

ただ、その後すぐに国民儀礼が礼拝において常態化していったかどうかは、週報からはわかりません。以後、礼拝で国民儀礼を行ったことが記録されている週報は、特別な礼拝だけだか

らです。ただし、1944年4月に南義子先生が赴任された後の週報は、「国民儀礼」の項目が予め印字された用紙が用いられるようになっていきます。そして、それが戦後の1946年10月20日まで使われ続けました。これによると、ある時期から毎週の礼拝で国民儀礼を礼拝の冒頭で行うようになり、少なくとも戦後しばらくはそれが続いたということなのだと推察します。しかし、いつからからいつまでという正確な記録は、小会記録にも残っていません。決議なしに初め、決議なしに終わったということです。

なお、南義子先生が赴任する以前に、国民儀礼が取り入れられた特別な礼拝というのは、1940年2月11日の*紀元節礼拝、1940年11月10日の*皇紀二千六百年奉祝礼拝日、1941年12月14日の大東亜戦々勝祈願特別礼拝式、1942年3月8日の大詔奉戴礼拝式などです。中でも、旧宗教団体法が施行された1940年4月1日以降に行われた特別な礼拝は、中会あるいは大会(教団成立後は教団本部)の要請に応える形で実施されました。また大・中会の背後には文部省があるということも、滝川教会に残る歴史資料から明らかです。

以下は、真珠湾攻撃直後に行われた「大東亜戦々勝祈願特別礼拝式」の中で朗読された「文部省訓令文」と「日本基督教団統理指達文」からの引用です。(いずれも滝川教会に残る資料)

「本日米国竝ニ英国ニ対シテ戦ヲ宣セラレ辱クモ大詔ヲ渙発…宗教ノ事ニ従フ者宜シク国体ノ本義ニ徹シテ率先垂範教徒及檀信徒ヲ教導シテ相率イテ聖旨ニ応エ奉ランコトヲ期スベシ
昭和十六年十二月八日 文部大臣 橋田邦彦」

この「文部省訓令文」を受けて、富田満が各教会にあてた通達文が次のものです。

「昨昭和十六年十二月八日を以て大詔渙発…是我國の自衛竝に東洋永遠の平和確立のため止むを得ざるに出たものである。我等日本国民たる基督者は今次宣戦の意義を諒解し、国家に赤

誠を捧げ国土防衛に挺身戮力するは勿論、進んで銃後奉公実践に萬全を期し遺漏なからんことを期せねばならない。殊に我等基督者はこの時報時局に際し、祖国精神界に対する重大任務を思い、能くその重責に覚醒奮起し、金剛不壊の信念を国民に与へ、堅忍不拔、寂然不動の精神を養い、以て祖国に負ふ我らの使命を完ふすべきである…昭和十六年十二月九日 日本基督教団 教団統理 富田満

この二つの文書は遠軽教会には残っていませんが、これを受けて遠軽教会は真珠湾攻撃後の最初の主日礼拝を早速「大東亜戦々勝祈願特別礼拝」として守り、しかもその礼拝の聖書朗読と説教との間に、この二つを朗読したのです。

蛇足ですが、現在遠軽では町内に郵便を出しても最長5日掛かることがあります。それに比べたら、当時日本の北端にあるこの遠軽教会にも大会・中会からの通達がこれほど迅速に届いていたことに驚くばかりです。そして、それをかくも忠実に実行した遠軽教会。それほどの厳重な政府による統制が、地方の末端の教会にまで及んでいました。



←第38回定期総会記録
教団成立後、初の遠軽教会総会
1942年2月1日
・昭和十六年度教情報告(木口牧師)
「内外多事多難なる折柄、当教会員一同熱烈なる祈りを天父に献げ各自教会を中心に信仰を以てその職域奉公につとむ銃後の生産部門に携わる会員亦本年度は異常なる耐え、又第一線に其の子弟を送り

真の平和確立の日を待望みつつ前線銃後一体となりて、祖国と神とに殉せんとす。本教会は又教界進展の氣運にある日本基督教団に加入致し、遠軽教会と称す。依而祖国教化、神国到来のため一翼を張り其の信ずる所を益々堅うし之を直に実行に移して以て基督者たる本分をつくさんとす。先ず礼拝を重んじ、聖日朝夕礼拝、家庭礼拝及家庭集會をして左の如き精練ををさめんめたり。」

2、前線に赴いた青年たち

さて、その厳しい統制下では、旧宗教団体法のもと設立した「日本基督教会ナル教団ニ漏レテ單立教会トナル」ことは「不幸ヲ見ル」ことであると、最初に見つかった富田満の通達文書には記されています。

“幸いにも” 遠軽教会は1942年の第38回教会総会で教団加入を決議し、同年3月31日に無事国からの認可を得て存続しました。その時の総会記録にある木口正八郎伝道師の文章にはこうあります。

「内外多事多難なる折柄、当教会員一同熱烈なる祈りを天父に献げ、各自教会を中心に信仰をもってその職域奉公につとむ銃後の生産部門に携わる会員、亦本年度は異常なる試練に遭遇せるも信もて克ち之に耐え、また第一線にその子弟を送り真の平和確立の日を待ち望みつつ前線銃後一体となりて、祖国と神とに殉せんとす」

この言葉の通り、祖国のために死ぬことを辞さない覚悟であった遠軽教会は、多くの青年たちを戦地に送りました。しかしこれはつまるところ、教会が生き残るために、代わりに青年たちの命を差し出したということなのではなかったでしょうか。

週報では、教会の青年たちがどこの部隊に配属され、どこの戦地に送られたかを都度詳しく報告しています。また青年会記録には、牧師を交えて送迎会や帰還祝いを実施したことも記されています。そうして、戦地に赴く会員を激励し、その功績をたたえ、その死や負傷を名誉あるものとしたのです。

青年の一人で、現長老の菊地利男さんと菊地正さんの叔父にあたる菊地七朗さんは、遠軽教会で唯一戦地における任務遂行中に戦死した方でした。横須賀海兵隊に入隊した七朗さんは、1944年10月のレイテ沖海戦で、乗艦した駆逐艦「出雲」と共に海に沈んだのです。菊地長老は当時を振り返りながら、「叔父の骨は一つも

帰って来なかった」と苦虫を嚙むような顔で話してくださいませ。

菊地七朗さんをはじめ当時の青年たちの存在は、私たちの教会がアジアの人々に対しては勿論、教会が送り出した青年たちやその家族に対しても戦争責任の告白と謝罪をする必要があることを教えてくれます。結局教会は、国家が一人の国民の命よりも天皇の命と国を重んじたように、一人の会員の命よりも地上にある見える教会の器を重んじる過ちを犯してしまったのではないかと思うのです。教会の器より教会の群れの一人ひとりが大事であることは言うまでもないことです。しかし、現れ方は違っても、同じような問題は今の教会にもあるのかもしれない。牧師不足や信徒の少子高齢化、それに伴う経済的困窮の中で、信徒一人一人の魂のケアよりも教会の維持に心奪われるようなことになっていないか、自問するものです。

ところで青年と言えば、当時遠軽教会に赴任した二代目の山下操六先生、三代目の生月前先生、四代目の木口正八郎先生は皆、神学校を卒業したばかりの青年でした。初代牧師の山下善之先生は明治維新を経験し、自由民権運動に参加した方でしたが、その世代が一線から退き、明治以来の義務教育(教育勅語)によって養われた次の世代に引き継いでいく世代交代が、遠軽教会でも起こっていました。そのことが、宗教団体法の成立や教団の設立と加入に対する遠軽教会の態度に少なからず影響したのではないかと思います。つまり明治以降の世代はそもそも天皇主権の国家に抵抗がなかったのではないかということです。

これは川島幸夫氏が著書「賀川豊彦と太平洋戦争」(中川書店)の中で、賀川豊彦が太平洋戦争期に戦争支持へと転換した理由の一つに挙げていることで、「賀川の精神構造の奥底に定着していた《天皇への崇敬》…それは、明治以来の義務教育を通じて日本国民の中に植え付けられたものでもあった。」と記しています。

なお、純農村の遠軽教会は賀川豊彦とも深い関わりがあり、賀川豊彦が設立した農民福音学校に青年を派遣するなどしていました。また賀川豊彦は満州基督教開拓村構想に協力したことが知られていますが、山下操六先生が北支派遣部隊の任務を終え帰還した後、1941年6月からは満州吉林教会の牧師に赴任したこと、またその直後遠軽教会では満州熱河伝道に仕えた福井二郎氏を招いて特別伝道集会を開催していることなど、何かしら関連があるのではないかと推察します。ただこれはさらなる検証が必要です。しかし農村と教会、この二重の立場から、遠軽教会は報国の道を進んだことは間違いありません。

話を戻しますと、遠軽教会は若い伝道者たちの下で戦時下を過ごしました。そうして、多くの青年たちを戦地へ送り出したわけですが、少なくとも山下操六先生と木口正八郎先生は自身もやがて軍隊に入隊し、戦地に赴いています。特に遠軽教会は山下操六先生について週報で詳しく近況を知らせています。それによると、山下操六先生は1938年から応召軍務に服し、北支派遣部隊に配属され、負傷の為一時前線を離れますが、中尉にまで昇格して任務を貫徹、1940年に帰還します。週報にはこれらが「山下操六氏名誉の戦傷」とか「名誉ノ凱旋サレル山下操六氏ノ来遠」との見出しのもと報告されました。そして帰還後、1941年2月15日から17日に亘って大々的に行われた歓迎集会については「山下先生による集会は、各会とも常に恵まれたものなりき。これにて教会員は益々一致結束以て銃後の精神、報国の誠を完うせんことを期す」と伝えてあります。また遠軽教会には、操六先生が軍服姿で腰にサーベルを挿して講壇したという逸話が残っていますが、もしかするとこの時の集会でのことかもしれません。

3、伝道集会

一信徒と町民に対する精神教化一

ところで、この集会は単に会員向けのものでなく、町民に向けたものでもあり、講演会の一つは小学校を会場に行われました。これはつまり、銃後における教会の報国の使命は、教会員と町民の精神教化であると受け止めて、実践していたということです。また、そのように国家に積極的に協力する姿勢を内外に示さなければ、“鬼畜米英”の宗教として迫害を受けていたキリスト教会は立ちえなかったのではないかと思います。

これに関連して、遠軽教会では無牧師となる1942年6月まで、実に多くの伝道集会在実施されました。一部、講師と講演題を紹介しますと、伊達教会牧師土居浩郎による講演「日本の世界的使命と国民精神の聖化」（1938年2月6日実施）。大会書記村岸清彦による二講演「キリスト教の生死観」、「時局の動向とキリスト教」（1939年7月15、16日実施）。北一条教会長老西村久蔵による講演「戦争と信仰を語る」（1940年2月18日、皇紀二六〇〇記念 北見地方基督教徒親睦修養会において）。その他、日曜学校局理事長小平国雄や北一条教会牧師小野村林蔵、大森教会牧師佐波亘など名立たる方々が、遠軽で講演会を開き、時には洗礼式も執行し、また時には大・中会からの献金の依頼を行いました。おそらくこうした集会の多くは、遠軽教会独自で計画したものではなく、大・中会で計画され各教会を巡回する形で行われました。先に上げた山下操六先生帰還歓迎集會も、北海道巡礼伝道旅行の一環であったとの記録があります。

4、その他の奉仕 一鐘の奉献一

さて、遠軽教会は報国の使命として会員と町民の精神教化に努めてきたことを申し上げましたが、その他の具体的な報国の実践としては、終戦までの約一年間に託児所を運営したことと、会堂の一時的な徴用に応じたこと、そして教会の鐘を奉献したことを上げることができます

。ここでは教会の鐘についてだけお話しします。

遠軽教会の高くそびえる尖塔には、1924年に教会独立を記念してピアソン宣教師から送られた鐘が据え付けられていました。この鐘は一度1931年に会堂が火事で焼失した際、溶けて損傷してしまいましたが、1935年に鋳直して現会堂に再び据え付けられました。しかし、1942年2月に小会は、鐘の献納と10か月間の銅鉄回収運動実施を決議します。そうして同年12月のクリスマス礼拝で鐘を鳴らしたのを最後に、教会の鐘は集まった鉄屑と一緒に国に献納されました。このことは当時新聞記事にもなり「平和を告げる鐘…決戦下鉄回収運動に決然と応召した」と報じられました。また1952年の教会月報の一文にはこうあります。「その美しい音が四隣に及んでいた教会の鐘は、鉄瓶や弁当箱と一緒に日米戦に参加して出陣したのは昭和十七年であった。おそらくどこかで無慙な最後を遂げたことであろう」

旧日本基督教団が献金を募って軍用機を献納したのは有名な話ですが（滝川教会には「日本基督教団號」の名が刻まれた艦上爆撃機の絵葉書が残っています。本誌4頁）、遠軽教会の“平和”の鐘もまた軍用機が何かに形を変えて殺戮の道具となったことに心を痛めます。

戦後教会独立50周年を記念して再び据えられた教会の鐘は、現在原水爆禁止遠軽町民協議会の依頼を受けて、広島・長崎の原爆投下日時にあわせて鳴らしています。遠軽教会の鐘が将来にわたって平和の鐘であり続けるために、鐘



↑遠軽教会現会堂 1932年献堂

の音を聞くたびに、この悲しい歴史を思い起したいと思います。

戦後の遠軽教会

最後に、敗戦を迎えた遠軽教会について簡単に触れたいと思います。敗戦の約一年前に南義子先生を牧師に迎えた遠軽教会は、これを機に託児所を運営して、やはり銃後奉仕という名目で、男手のなくなった家庭を支える女性たちの援助を名乗り出るのですが、その託児所のために敗戦の直前まで防空壕を敷地内に作り、また国旗掲揚塔を設置する予定を立てていました。しかし、その計画は敗戦をもって白紙になりました。一方、礼拝は一度も欠かすことなく淡々と続けられました。そして先に触れた通り、週報上は「国民儀礼」を残したままでした。

また総会記録を見ると、敗戦の混乱と国民の困窮に触れて、教会の使命は「今こそ祖国再建に重責を負ふ」ことと記され、その使命に対して「主の前にお互(い)の努力の拙きを反省し悔改めざるを得ません」とあります。(1947年総会記録、なお1946年総会の記録はない。)同じような言葉は、1949年の総会記録まで繰り返し使用されていきます。けれども、どこにも戦時下に教会が行ったことに関しての反省は見られませんでした。

印象としては、祖国のために果たすべき使命の内容が、戦争協力から復興と平和のための働きに変わったということです。それは何も間違ったことではないのでしょうか、しかしその変化は国の憲法が変わったことが一番の理由であって、必ずしもみ言葉による悔い改めと立ち帰りによるものではなかったように感じます。つまり教会と国家の関係性は本質的に変わらず、その意味で戦後の教会は戦前を引きずり、脱却しきれなかったのではないかと感じるのです。

ところで遠軽教会は、1955年に再び山下操六先生を牧師に招聘しました。終戦を挟んで同じ

教師を二度招聘するのは大変まれなケースですが、一度目の離任後にも頻繁に講演や説教応援を受けていた関係性を思うと、自然な成り行きだったのかもしれませんが。

戦前は軍人としても牧師という特別な立場を活かし、宣撫工作或治安工作にも積極的であったという山下操六先生の、戦前と戦後の牧会がどう変わっていたのか、あるいは変わっていなかったのか。そのことを知る手掛かりは、今はまだ見つかっていません。けれども、おそらく教会も先生自身も、強いてこの問題に触れようとはしなかったのではないかと推察しています。戦後80年が過ぎようとしている今の遠軽教会にとっても、敬愛する先生の影の歴史に光を当てるのは躊躇があり苦痛を伴うのですから、当時の人たちがこれをなしえなかったのは無理もないかもしれません。そして、これは遠軽教会に限った話ではないと思います。しかしそのために、かえって全体教会の戦争責任が、個人個人の戦争責任として分散・転嫁されて、相対化されてきたということはないのでしょうか。けれども、少なくとも遠軽教会の資料は、これが“不幸な単立教会”の単独の歴史でなく、国家に協力することを選んだ旧日本基督教会および旧日本基督教団の歴史であることを伝えていきます。その歴史の全体像を知るために、一人一人の、また一つ一つの教会の事例に対する検証を積み重ねていく必要があるように思います。

他方、生月前先生と木口正八郎先生は戦後牧師に復帰することは終にありませんでした。お二人の戦後の歩みについては、敗戦直後、政治活動家に転身したということだけが分かっています。教師だけでなく信徒も含め、戦後教会に留まることができた者と留まることができなかった者がいたという事実を重く受け止めます。双方の相互理解と和解もまた、今の教会の宣教の課題なのではないかと感じます。

結び

遠軽教会の戦時下の歴史検証は始まったばかりです。幸いなことに、今の小会はこの取り組みに大変協力的です。そして、これが少しでも日本キリスト教会全体の歴史検証に資するものとなり、今後の教会の進むべき方向を示す材料となることを願って、一緒に取り組もうとしてくれています。(ヤスクニ・社会問題委員会委員／遠軽教会牧師)

(ウキペディアより)

*日本基督教団の国民儀礼の次第 [1]

鐘鳴る 会衆起立、不動姿勢を取る 教職者入場
鐘止む 会衆右向け宮城を向く
国歌奏楽 総員最敬礼
キーミーガーアーヨーオーハーまで済むと総員直れ、上体を起こす
国歌奏楽中 そのまま黙祷(出征軍人傷痍軍人戦没軍人並遺族の為、又大東亜戦争完遂の為)
国歌奏楽終る 会衆左向け
教職者着席
会衆着席
礼拝開始奏楽始まる

遠軽教会では、1941年に日本基督教団が「国民儀礼」を定める前の1939年1月1日礼拝に国民儀礼を行っているようだが、その事情は？

*「紀元節」 (ウキペディアより)

「日本書紀」「古事記」が伝えるところによると、神武天皇は、紀元前660年の1月1日に畝傍山の東南、橿原宮(かしはらのみや)で第一代天皇として即位したとされる。1873年(明治6年)1月29日、政府の意向で神武天皇即位日を祝って、**神武天皇御陵遙拝式**が各地で行われた。同月、神武天皇即位日と天長節(天皇誕生日)を祝日とする布告を出している。同年3月7日には、神武天皇即位日を「紀元節」と称することを定めた(明治6年太政官布告第91号)。

戦後責任を担う取り組み

—地域の無料食堂—

稲生義裕

地域を知る・地域と関わる

日本キリスト教会札幌豊平教会が地域の方々と共に取り組む、「手作り無料弁当」を通して「共生社会」を求める活動についてご紹介します。一

古くは1970年代から「シモン文庫」と名付けた子ども文庫活動を行い、地域の子どもたちと繋がる努力を重ねよい働きをしてきたが、文庫活動は携帯ゲーム機の登場にトドメを刺された感がある。

2010年春から教会を借用して牧師家族による「放課後の遊び場」が数年間続いた。諸事情で閉鎖を余儀なくしたが、ここで地域の子どもたちの貧困を、つぶさに見ることとなる。夜遅くに親が帰宅するまで小学生の子どもと未就学児だけで過ごす家庭。生活費を稼ぎ出すために未就学児を家に放置して、仕事に向かう親。見る大人がなく一人で街を放浪する幼い女兒。夏休みに子どもをプールに誘うと、「親がこんなに苦労してるのに、子どもだけ楽しい思いをするなんて許せない」と表情を固くこわばらせてしまう母親の苦悶。

子ども白書は、相対的貧困率15%と。7人に一人は、まともに食事を摂れていない。

天使大栄養学科・看護学科の学生による月1〜2回程度の「天使食堂」が試みられ、子どもたちにはお姉さんと遊べるのが嬉しいと大好評。これは現在、学生さんの卒業や転居で長らく休眠状態にあるが、夏休みに3〜4日連続で行う「夏休み、宿題やろうぜ!」という隠れ子ども食堂は、長く健在。学校給食の無い夏休みに、毎年10人程度の子どもたちが学生ボラさんと楽しい日々を満喫する。

“隠れ”子ども食堂とは、「子ども食堂開設」が貧困対策として報道されることで生じた、子ども食堂に行く子への蔑視や親の抱く抵抗感に配慮したもので、「子ども食堂」の呼称を封印した子ども食堂のことで、堅実な活動を続けている。

今・ここに・生きる個教会としての戦争責任告白

時は遡るが、札幌豊平教会は、1996年の教会総会で、『戦後50年を迎えての日本キリスト教会札幌豊平教会の罪の告白と新たな宣教への決意』を一個教会として採択した。この告白の特徴は、教会員全員の学習と討議によって生み出されたこと、「(旧)日本基督教会が果たした戦争協力などへの役割について、正しい認識と十分な反省の上に

立った上での教団離脱と（新）日本キリスト教会創立ではなかった」という認識、そして戦中責任に合わせて戦後責任の果たし方にも言及している点であろう。戦後責任の果たし方として、「神の言葉によって絶えず改革され」「真に神と隣人に仕える教会」となること、「豊平に建てられた歴史的意義をふりかえり、地域の課題を担うこと」を挙げている。

告白は、必ず行動に

この戦争責任告白から20年を経た2016年教会総会は、「他者と共に、他者のために」という方針を採択すると共に、一同で約束を交わした。

「神の御心がここにあると信じるならば、必ず行動に移す。できない理由をあげつらわない。主の御心であれば、必ず成就することに信頼する。」と。

中心となった聖句は、**ヤコブの手紙 2:26『魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです』**など、信仰と行いに関するものであった。

この総会決議から、戦後責任の表し方として「隣人の必要に仕えて歩む」姿勢が具体性をもって生まれてきた。日曜学校教師会は、教会に来る来ないに関わらず、地域の子どもの心に心を寄せる取り組みを提案した。それが「月曜日の朝ごはん」であった。土曜・日曜と学校給食を食べていない子どもたちの栄養状態は月曜朝に最も落ちている。月曜朝に食事を調べ、子どもたちを学校に送り出したい。同時にワーキングプアと言われている若者たちの一週間の始めのブルーな気持ちに寄り添い、栄養を注入したいと、教会は考えた。労使問題の相談にあずかる前に、先ず食を通して繋がっていきたく、私は考えていた。

『そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見ら

れる僕は幸いである。確かに言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。』(ルカによる福音書 12:41~44)

この聖句から、御言葉を聞く信仰者の姿勢について、教会の隣人と地域社会に対する責任的在り方について学んでいた。身体を伴って地上を生きる者の隣人に対する責任の第一は、食の分かち合いにある。

教会の仲間たちは、「それは良い、是非やりたい」と。しかし、思いがあっても、地下鉄・バスの動いていない朝6時からの調理には来られない…。自分は歳を取り過ぎた…。できない自分がもどかしい…。結局、教会内の人材は“無い”。早速、壁にぶつかったが「それが神の御心であると信じるならば、必ず行動に移す」と私どもは、約束を交わしたはずだ…。

教会に人材がないならば、どうする。「地域の方に相談しよう」。早速、教会の属する町内会に打診。その返事は「皆、高齢でダメだわー」。

でも、そこで諦めない。更に、地域の団体・個人を訪ねた。「子ども」「青年」「福祉」「平和」「人権」「憲法」などに関心を抱く方々に、教会の思いを伝えて、実行に移したいと次々に相談を持ち掛けた。……。

総会から5か月近くを経た6月には、2つの小学校前でチラシを渡し、6月末の月曜日朝、いよいよ「朝ごはんの会食」の時を迎えた。そこに子どもたちの笑顔を思い描きながら…。ところが来ない！子どもも若者も殆んど来ない。訊いてみると「オレたちは飯を食うよりも、朝は少しでも長く寝ていたいんだ」。

思わぬ展開 1

しかしこの取り組みを市民の皆さんと共に継続するうちに、生活に困窮する高齢の方がおいでになる。また路上生活の方がおいでになる。札幌の冬は厳しく十分に暖を採れないと死んでしまう。そこで夜を徹して街を歩くことで命をつなぐ路上生活の方々。朝方、温かい味噌汁とご飯が、疲れて冷え切った体を温める。子どもは来なくとも、隣人に仕える朝の会食となった。

朝の会食は、「作る人／食べる人」の隔てを設けない。そのために、路上生活の方々や夫々の御事情があって困窮を極めている方々と共に、スタッフもテーブルを囲んだ。それは、人と人との出会いをじっと考えさせるものであった。朝の会食の準備側は、つい会話の糸口を「私は〇〇。あなたのお名前は？」「お住まいはどちらで？」「御出身はどちら？」「お仕事は？」「ご家族は？」「ご趣味は？」などなど、尋ねたくなる。しかし、それらの問いかけの大部分又は全てに、答えられない、又は答えを伏せておきたい路上生活の方々。その人の「社会的属性」を尋ねるのではなく、人を「その人そのもの・生の人間」として観ること、観られることが求められる。「人を観るとは、何を観て何を聴くことなのか」との自問の中で、箸を口に運ぶ。そこは厳しい訓練の場でもあった。

箴言 17 : 5 『貧しい人を嘲る者は造り主をみくびる者。』

ヨハネ 13 : 15-17 『わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。はっきり言うておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。』

隣人の中に、その方を遣わした方を観る。

思わぬ展開 2

翌 2017 年 2 月頃だったか。「3 月末で活動を閉じるから、その後を…」路上生活者限定で 15 年間、毎週金曜日の「どんぶり麺」給食に取り組んできたカトリック信徒ボランティアグループから打診があった。その重い内容にしては、急な要請であった。

私どもが、毎週の取り組みに打って出るには、確かに人材も資金力も極めて乏しい。担い手や継続性への不安が心をよぎる。けれど小会（長老会）は開始を決定。年度替りの 4 月の第 1 金曜日から、年間を通して毎金曜日の食事作りが始まった。やはり市民の方々の力がとても大きい。教会は活動全体のコーディネートさせて頂きながら、多

くの市民の方々に信頼を寄せ、感謝の内に歩み始め、今も歩んでいる。

方針転換と「お替り食堂」命名てんまつ

私どもは、「路上生活者への炊き出し」の継続を委ねられたのだが、方針を変えた。路上生活の方々に絡むとすぐに『炊き出し』という言葉が出てくるが、それは例えば年末や災害時の緊急的給食活動のことである。

路上生活の方々ばかりか誰でも人は、食糧を必要とし、また食糧さえあればよいのではない。希薄になり失われた人との関わりの中に、再度身を置くことが誰にとっても極めて大切なこと。私どもは、“小ぶり”の茶碗に飯を盛り食卓を運ぶ。出来立ての家庭料理を召し上がって頂く。食卓には必ず小さな花を飾って、明るい気持ちと、人間の尊厳を失わないようにと心がける。食べるということは極めて大事なことだが、食堂が、集う方々の憩いの場・居場所になってもらうことを考えながら、自然な声掛けを大事にしている。

「お替りくださいーい♥」の声、会話の糸口となる。和やかな食事風景が生まれてきた。小振りの茶碗がもたらす心の交流である。もちろん、食堂には、どなたにでもお越し頂く。ベンツで乗り付けても、車いすで乗り付けても OK。誰もが隔てなく集う場が「この場」である。

ところで開始より数か月を経ても名前がなかった。食事中の方々に命名を頼むと『お替り食堂』がいい！それがいい！と。大いに盛り上がり名前が付いた翌週、お替りを差し上げるだけの食材を集めることができなかった。命名談義は再燃して、『とよひら食堂』に変更と決まった。何とも無難な名前に落ち着いたが、札幌豊平教会では、身寄りのない方が亡くなられた時には葬儀も埋骨も行うことを決めた。ただ、本名で暮らしていない方も多く、知らないうちに緊急入院となり、御姿が見えなくなっても、消息をたどることができないのが現実。

何ということだ……

2020 年 2 月、それは突然やってきた。札幌雪祭りをきっかけに新型コロナの大流行である。「市

中感染」が報道されると、「食堂」を直ちに閉鎖。手作り「弁当」に切り替えた。食堂でのクラスター発生は、活動の全面停止に繋がることから、それは避けねばならなかった。

当時、食事の数は60食、その内の20食を弁当にして路上生活の方に届け、食堂では40人ほどの方々が食事を楽しんでおられた。朝の食事会では、ボラさんも一緒に食べることから30食ほど調べてきた。この和やかな風景をコロナがいっぺんに変えてしまった。

奉仕はオプションではない

“教会の本分は礼拝にある。無料食堂はできる時にやればよい”という安全圏に身を置く隣人への関わりが『忠実で賢い管理人』（ルカ12:42）の姿であろうか。隣人と共同体（世界と教会）に対する責任をどう認識するのか。

食堂スタッフも小会（＝教会役員会）も、“休止”は考えなかった。礼拝を継続する意志のある者は、奉仕（弁当作り）をも継続する。そのために学びあらゆる工夫を通して集団感染を出さないで行こう！

厨房での一人だけの調理作業を行い、ホールでの一人だけの弁当詰め作業を行い、どうしても求める方々の食数を作り切れないと判断された場合には、心を込めて惣菜なしの「日の丸弁当」を必ずお渡しすることを申し合わせた。この現場の決断が、教会の礼拝と奉仕に対する認識に良い意味で緊張感をもたらした。

貧困は深く広く

ところで、コロナ禍の影響は大きい。流行開始から4年近くとなる2023年末で、毎週金曜昼の弁当は450食程に増え、月に1回の月曜朝の弁当は100食となる。コロナの影響は甚大といえる。貧困が、深く広く浸透していく。

路上生活者の方々には大きな変化は見られなかったが、仕事や住む所を失う方々が弁当を求めてお越しになる。路上生活の仲間入りする方もある。多少の金銭がある場合には、ネットカフェで寒気と危険を避ける方もある。外国人留学生は飲食店でのバイトを失い、すっかり困っていた。こう

した状況の中で、徐々に大量調理を求められるようになった。

仲間も深く広く

コロナ禍は私どもの活動に、多くの困難をもたらしたが、その反面、多くの仲間を見出す機会ともなった。

早い時期から支えてくれた仲間日本キリスト教会札幌琴似教会に加えて、札幌バプテスト教会の仲間たち。外国人留学生を意識した日本聖公会札幌キリスト教会が、それぞれの特徴を生かして活動に加わった。

多くの困窮男性が集まる所に、女性は殆ど姿を現さない。黒いフードで顔を隠し、弁当を受け取ると小声で謝意を告げ、足早に去る女性があった。むしろ女性の貧困が深刻な日本であるのに……。女性専用の場が必要だと思わされた。ディバイディという薄野のジャズバーが女性・LGBTの方々に弁当をお渡しする拠点となって下さった。

食材は複数のフードバンク・農業生産者の方・魚屋さん・肉屋さん・食品加工の方・商店の方、そしてこの活動を覚えて下さる多くの方々、教会玄関にそっと食材を置いて立ち去る近隣の方々に支えられている。

賜物を捨てる痛み

食材のことに少々触れると、基本的にはできるだけ購入を控える方針。食べられるのに捨てられてしまう食品を救い出して使う。日本は「食品廃棄大国」と言われるが、フードロス（食料廃棄）を大量に生み出すシステムや消費行動への否！である。2015年農水省の調査で推計647万トンが廃棄され、これは国連WFPが支援した食料の総量380万トン（2017年）の約1.7倍に当たる。自給率が低く62%（カロリーベース）を輸入に頼る日本の現状がこの有様である。

私どもは、食べられるのに廃棄されてしまう食品に、さながら新しく命を吹き込むようにして調理の手間をかけていく。そうでもしなければ食堂経済は直ちに破綻するからでもある。本当に沢山の方の思いと力が集められ、食材提供・食材運搬・調理・調理品運搬・対話と手渡しという共同作

業に携わることで、コロナ禍にあっても活動の継続が可能とされてきた。

「無料です」と息巻く

無料食堂はどなたからも料金をいたしません。『神様から無償でいただいた賜物に値段をつけてお渡しすることはしない』。多くの賜物を頂いた者は、賜物を分かち合う喜びと責任をも預かっている、と思う。人と人との共同性の回復が、神の賜物の分かち合いを通して、そのつど立ち現れていく。

食べ物は神様から無償でいただいたものだから、食事にお金はいただかない。これを非常に大事だと思っている。神の大地は、人が所有権を決めて金銭で取引するものだろうか。水も、空気も、また食料も、金銭を媒介に取引するものではない。もちろん医療も福祉も教育も同様。無料食堂は、基本に立ち帰るための実験的取り組みだ、なんて言ってみたりもする。最近では、当番のシフト制をやめて、「人が人を管理するのはよそう。それぞれの異なる賜物は、一つの霊の賜物。それぞれが、自発的に他を思いながら楽しく取り組もう」なんて言ってみたりもする。ここは、聖霊の賜物が他を生かし合う実験場。多様な個性のボラさんが集う。

奉仕から見えてきた礼拝理解

「戦後責任の表し方として」「他者と共に他者のために」「隣人の必要に仕えて生きる」。こうした歩みを8年間続ける中で、教会が変えられてきた。見える姿では、毎日のように多くの地域の方々が入り出す空間となった。また見えない姿としては、礼拝理解が深められた。すべての一週間が、〈主日礼拝；神を崇め神の御意志を聞く〉〈水曜の祈り会；神の御意志を生きようとしてなお自分を生きてしまう自分を見つめ、自分を捨てて御心を生きるために、聖霊の御働きを切に祈る〉〈木曜・金曜；他者の必要のために自分を捧げる奉仕へと向かう〉。この三者が《神奉仕》としての一つの繋がりに結び合わされ、生活全体が礼拝として認識され、聖霊の御業によって神の御業に用いられていく。

御言葉を聴き、聖霊の御業を求めて自己変革（自己放棄）を祈り、隣人に仕える一週間の歩みの全体が礼拝であることに気づかされた。礼拝と奉仕は、正に一つのものである。見えない神を愛することとは、見える隣人に仕えることである。

「イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

（マルコ福音書 12：29～31）

神の御前にある私どもの生き方は、神礼拝と隣人奉仕が二つで一つとなるところにある。

『こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。』（ローマ 12：1～2）

礼拝とは「献身」であり、「仕える行動」である。そのためには聖霊の御業によって「心を新たにして自分を変えていただく」ことが必要。

礼拝と奉仕は、一つであった。礼拝は奉仕であり、奉仕は礼拝であることを今更確認するのである。

上記《神奉仕》の認識が深まると、自己目的をキッパリ捨てて、他者の必要に仕えることが、主イエスの生き方であったことに改めて気づかされる。はじめは、奉仕は伝道に結びつくのか？礼拝に参加する人が新たに与えられるのか？と問う向きもあった。しかし今や、「教会の会員増加」「経済充実」という制度教会の自己目的（保存と拡大）を語る者はいない。家族の葬儀のために食堂休止を求める遺族もない。命に仕える業が尊ばれる

。だからと言って、奉仕の業に慢心や誇りは厳しく排除される。奉仕は徹頭徹尾自己目的を捨て、神と隣人への集中において行われる。

奉仕を通して、凶らずも新たなメンバーが教会に与えられるとすれば、それは私どもの伝道的成果ではない。聖霊の御業による神からの賜物ある。伝道の主人公は聖霊であることを忘れてはならない。聖霊の御業による伝道が起こされるとすれば、それは無私の奉仕と無関係ではない。教会は、余分なことを思わずにひたすら奉仕（ディアコニア）に生きることであろう。教会の「宣教意識」それ自体が、制度教会の自己保全衝動ではないのかと、自問する。

礼拝の構造は、そのまま宣教の構造であった

礼拝と奉仕が〈一つの神奉仕〉であることを奉仕の中から教えられたのだが、奉仕という行動の中から教えられることは、そればかりではない。礼拝の構造が、そのまま宣教の構造であることに気づかされた。

それは、「日曜の礼拝があり説教があれば宣教があるのだ」という理屈ではない。それは隣人のもとに出向く足と差し伸べる手を持たない、つまり身体性を持たない抽象的な理屈に過ぎない。

『もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。』（ヤコブ 2：15～17）

福音の宣教は、観念的思惟を語る事ではなく、人の（被造物の）存在の全体を包む、神の事実を顕わし伝えることである。

さて、礼拝の構造が、そのまま宣教の構造であることに気づかされたとは、どういうことか。

先程、礼拝（神奉仕）を三つの要素から捉えた。つまり〈聴く〉〈祈る〉〈行う〉である。宣教も同様である。〈神の御支配の事実を聴く〉〈神の御支配を顕わすために祈る〉〈隣人の必要に仕えて

神の御支配の事実を顕わす〉のである。こう申し上げると違和感をお持ちになる方が、多いかと思うが、ここで主イエス御自身の言葉に聴こう。

「神の国の福音」と宣教

『ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。』（マルコ福音書 1:14～15）

ここに主イエスの福音理解・宣教理解が、主イエスご自身によって語られている。

福音とは、「今、ここに神の御支配が来たり、在る」という事実である。そして主イエスの語る福音の宣教とは、〈今ここに、神の御支配の事実を受け止め〉〈今ここに、神の御支配を顕わすために、自分を捨てて〉〈今ここに、隣人との関わりの内に、神の御支配の事実を聖霊の御力によって顕わすことに用いられる〉ことである。

主イエスご自身の福音宣教は、隣人の必要に仕え病気を癒し悪霊を追放し、神の御支配の事実を顕わすことに用いられる、というものである。これは、ご自身が語る（マルコ 1：14-15）通りの福音宣教の姿である。主イエスの弟子たちも、宣教に派遣されるに際して、宣教と奉仕を一つのものとして捉え、隣人の必要に仕えて、病気の癒しや悪霊の追放という出来事を通して神の御支配を顕わした。（ルカ福音書 9:1-6 他）

ペンテコステ後の使徒たちも同様であった。聖書には使徒ペトロや使徒ヨハネの宣教の姿が記されている。（使徒言行録 5：12-16 等）

もう一つの福音理解

福音の宣教という時、多くの方がイメージするのが、パウロの福音理解とその宣教である。これを「御子の福音」と呼ぶが、御子イエスの十字架と復活の出来事に関するパウロの理解、すなわち「御子の代理犠牲によって、人類の罪は贖われた」というパウロの抽象的理解を指して言う。おそらくは、キリスト教がローマ国教とされて以降、主イエスの「神の国の福音」と宣教とはすたれ、パウロの「御子の福音」が取り上げられていった

ことだろう。崩壊寸前のローマ帝国が、統一的支配の道具としてキリスト教の利用を企てた時、抽象的概念で表される福音は、変容可能で政治化して利用し易いからだ。神の御支配の事実を顕わす「神の国の福音」は、地面をはいずって生きる人間の生活の内に「神の御支配の事実」を顕わす取り組みであるから、個々の生活者が個別的経験を通して神への信頼に導かれるものである。それは理念化や政治利用に馴染まず、帝国統一の道具には使えない。むしろ政治に流されない確固とした神信仰に生きる民を生み出していったであろう。世々の教会の歴史と今日において、私どもは、主イエスご自身の語る福音に対して、あまりに冷淡であり続けている。

国家主義に巻き込まれる教会と戦争

パウロの「御子の福音」とその宣教に軸足を置いてきたのが、ローマの“国教”と成り果てた以降のキリスト教会の姿であろう。聖霊の御業によって日々生み出され活かされる信仰者の共同体とその営みの息吹は消え失せたか、あるいは潜伏を余儀なくされた。一方ローマの政治とタッグを組むいわゆる顕教的キリスト教は、〈正統信仰〉の名の許にその神学と制度を構築していく。ローマの国家主義と寄り添いつつ肥満化・権力化するキリスト教会は、もはや聖霊の主権の許にはなく、人為的政治宗教の道をたどる。信仰共同体＝聖徒の交わりは、制度教会に管理される民の群れとなった。神の御支配を顕わすはずの「神の国の宣教」は、領土・領民を獲得する戦争に姿を換えて、やがて〈聖戦〉の名の許に異民族・イスラム教徒征伐に力を注ぎ、神の聖名を汚しまくる。その後の宗教改革は、どれほど真実の改革をもたらしたのか。私どもはキリスト教のローマ「国教化」に始まる政治的・制度的宗教を「使徒的伝統に根差した信仰」を保持した教会であると教えられてきた。そして私どもは、この歴史の流れの中に身を置いて、神学をし制度形成を経験している。

再び戦争に加担しない教会となるために

私どもは、戦争に積極的に加担し、実に多くの方々の尊厳といのちを奪った者たちである。

その私どもが、戦後責任を意識しつつ始めた無料食堂の営みを通して地域の歴史と地域社会の人々と共に課題に向かい合いながら聖書に聴くとき、教会が変えられていった。礼拝理解・福音理解・宣教理解・教会理解。それらを神が働きたもう聖霊の御業の躍動によって、自由かつ大胆に捉え直す作業に向かわせて頂いている。我らの教会が主イエスの御言葉と聖霊の導きによって根元から問い直されることを拒んでいたなら、また必ず福音の変容(戦時神学)を行い、屁理屈を捏ねて武器を持つに決まっている。人を殺すに決まっている。それが「今」の我らの教会の体質である。

教会と制度

我らは、「教会と国家」という問題の立て方を行う。しかし「教会と制度」という課題認識に乏しい。聖霊の自由な躍動に用いられる民らと主との交わりが教会であり、聖霊なる神の主権の許に「務め」が立てられるのはよい。しかし制度は人間的な主権の働く人為的なものであり、且つ自己保存・自己拡大の衝動をおのずから持つ。組織・制度は、常に暫定的であり最小限であり、聖霊の御業に仕える僕でありたい。制度教会を公同の教会と混同錯誤してはならない。そこに「教会と制度」という課題認識がある。その課題認識は、宣教を国家主義と軌を一にする「宣教」から解放し、自己卑下の内に消える教会の姿をもって、主の栄光を顕わす。

地上の人間にはパンが要る、地上の教会には金が要る。この事実を認め且つ突き抜ける信仰を与えられる時、失うまいと握りしめた一つのパンを隣人に差し出す神信頼に生かされる時、日本キリスト教会は戦争を止める質を持つことができる。国家主義・物質主義・制度教会主義にとどまるならば、戦争責任告白は空文の域を出ない。

*2023年10月16日靖国神社問題全国連絡協議会のレジュメを改訂縮小して本誌に掲載(ヤスクニ社会問題委員会委員/札幌豊平教会牧師)

【編集後記】2023年という年は、遠軽教会・滝川教会に保存された「歴史の一次資料」に出会う驚きの年であった。教会が歴史の中で主を証しすることは並大抵のことではないと実感。執筆者のお一人お一人に心からの感謝を…(I)